

技術課10年の歩み

本 多 八 郎

技術課は、専門技術を通して研究を支援する技術者の組織で、研究所長に直属し、研究施設や研究部門へ配置する形がとられている。

昭和52年、基礎生物学研究所の創設と同時に技術課は上記の主旨で設置された。翌昭和53年、技術課長を含め3名が着任した。当時、基生研はその2/3の建物が建設中で、教職員は旧愛知教育大学の建物に生理学研究所（以下生理研）の教職員と同居していた。昭和54年2月、基生研2/3の建物が完成し、移転を完了したのは夏に入ってからであった。昭和54年には係長1名を含む3名が赴任し、技術課が組織としての形を整えたのはこの頃であった。当時、施設の技官は分析室とアイソトープ実験施設に1名ずつで、共通棟がまだ建っていない時期であったが、機器や備品の購入及び大型分析機器の機種選択などに追われる日々であった。

昭和55年、施設系2名、研究系3名の技官が赴任し、技官定員が一挙に倍増した。大型スペクトログラフ室は設置の最終段階にあり技官が活躍した。研究部門も次第に充足されて部門への技官の配置人数も増加した。昭和56年、生理研の建物の完成と共に共通棟の建物の建設が開始され、技官は研究の支援の他に移転準備に忙しく、共通施設の技官は共通棟の建設に関する間取りの図面作成や設備に関する打ち合わせで設備課や建築課と連絡を毎日のように取り合った。

昭和57年秋に共通棟が完成、昭和58年には基生研全館が完成し、技官が本来の業務に専念できるようになったのは昭和58年の中頃といってよい。昭和59年には施設系課2名、昭和60年には施設系3名、研究系3名と一挙に6名の増員があったが、2名の女性技官が育児、出産等で退職し、他の1名は配置替えで、実質3名増に留まった。昭和61年には2名を研究部門に配置し、現在（昭和62年3月）施設系13名、研究系11名と合わせて24名という大所帯となった。

その間、昭和58年より月曜早朝ミーティングを定例化し、日常業務の情報交換や連絡体制が速やかに行われるようになった。また、技官相互で随時、生物学の基礎的な勉強会やパーソナルコンピューター実習、写真技術プロジェクトなどが行われ、相互研修への試みもなされた。技官は、施設・部門に於てそれぞれ専門技術を通して研究支援を積極的に行っているが、今後のあり方についてはまだ多くの問題がある。基生研に於ける専門技術とは何か、技官の技術向上のために何を成すべきか、日常業務をどうサポートし合うか、技術の評価をどうするかなど。

このような技官組織は、日本に於てこの機構以外にない新しい試みである。それだけに、その運営に多くの困難を感じつつも、この組織を新しい研究の発展に対応できる優れた技官を生み育てるものにしてゆきたいと念じ10年を迎える。

（技術課長）